Fujino Waldorf School

シュタイナー学園通信　2023 September

特集／対談

「シュタイナー学校の先生」という仕事

シュタイナー学園の先生たちに聞きました
～先生への道のり～

FUJINO STEINER COLUMN
13期卒業生　鹿俣智裕さん

特集 / 対談

「シュタイナー学校の先生」という仕事

シュタイナー学校の先生になるには、どんな資質が必要？
シュタイナー教育を詳しく知らないけれど、大丈夫？
「子どもと授業を作るのが楽しい！」という
シュタイナー学園の先生に話を聞きました。

帖佐美緒先生（6年生担任）写真：左
木原希先生（保健体育専科担当教員）写真：中
馬場愛子先生（1年生担任）写真：右
インタビュアー / 柳田真樹子（事務局広報）
ライター / 越野美樹

――シュタイナー学校の先生になろうと思ったきっかけを教えてください。

木原：保健体育の教員を目指して大学で勉強し、公立中学で1年間働きました。それまでシュタイナー教育を全然知らなかったのですが、ご縁あってシュタイナー学園を見学したとき、生き生きとした先生方の姿に共感したのです。

帖佐：木原先生が模擬授業をされたとき、教員がいくつか質問をしました。その答えを聞いて「本質を感じられている」と教員がみな感動しました。

馬場：木原先生は「これをやらなくてはいけない」ということよりも、目の前の子どもたちを見て感じ取り、その場で行動できる方ですね。

――シュタイナー教育はノウハウから入りがちですが、そうではないということですね。普段どんなことを心掛けていますか？

木原：赤信号を渡らないこと、人の悪口を言わないことです。常に心掛けていないと、子どもたちの前で出てしまうので。

――子どもは先生の背中を見て育つと言われますからね。馬場先生はどういうきっかけで教員になられたのですか？

馬場：大学のときに中国語の響きの美しさに魅了され、中国の企業で働いた経験から、4年前に学園の初等部の中国語専科講師になりました。娘が学園に在籍していて、親も教育者の一人という思いで学んでいたものの自信はなかったのですが、教員のみなさんに「みんな最初は初めて」と言われて踏み出せたのです。また、シュタイナーの著書『一般人間学』の中の「今ここに」という言葉のように、「今ここから進めばいい」と思い、今年度からは担任になりました。目の前の子どもたちと一緒に授業を作っていけることが、本当に楽しいです。

――心掛けていることはありますか？

馬場：まっすぐに立つことです。子どもたちにも、まっすぐ立って生きていってほしいです。

帖佐：私は「朝、教室のドアを開けたときに、個人的なものはすべて脱ぎ去ってまっさらな自分になる」というシュタイナーの言葉に共鳴しています。毎日唱える「朝の詞」（※シュタイナー学校で毎朝唱える始まりの詩）も、同じ言葉なのに毎回違って、新しい。日々の積み重ねも感じつつ、今日また新しくここに立つという気持ちを大切にしています。

――なぜ詩を唱えるのでしょう？

帖佐：シュタイナー学校に通っていた娘に「一番の思い出はなに？」と聞いたら、「ろうそくのあかり」でした。担任になって初めて教室でろうそくの前でマッチをすってみたときに、「なるほど」と感じました。1年生の頃の子どもたちはやんちゃでなかなか静寂などありませんが、毎朝詩を唱えているとあるとき、子どもたちから太いものが立ち上がる感覚がありました。詩の時間が子どもたちを支え、私自身も支えられています。毎日初心者でいたい、もっとチャレンジしたい、よくなりたい、やり続けたい、それはすべてにおいてそうだと思います。

馬場：この学校の先生方はすごく謙虚ですよね。これで終わりはないという感じ。

――そういう気持ちが大切なのですね。教員になる前に、何か研修などはあったのですか？

木原：1年目は体育の非常勤講師をしながら、他の授業を見学したり、言語造形・水彩などを一対一で受けたり、たくさんの研修を受けました。学園で伝統的に行われている「サボテン」「魔女と村人」など、その年齢の子どもたちに合っている運動遊びにも助けられています。

――教員養成講座も受けていますよね？

木原：国内の教員養成講座を経て、今年度から連携型教員養成講座を受講しています。勉強できることが楽しく、子どもたちと同じ気持ちになれます。美術の授業は今まで苦手でしたが、あえてはみだしても、水彩の先生は微笑んで見守ってくれました。講座は長期休みや土日中心なので、仕事をしながらでも無理なく受けられます。

――体育とは違う教科も、授業に活かせますか？

木原：音楽講座での先生のお話が特に印象的でした。例えば、〝顎を引いて話すと相手が権威を感じられる〟と聞いたので実際に行ってみたところ、それだけで子どもたちの様子が本当に変わりました。また、受講生の疲れを感じた先生が5分間横になるだけの時間を作ってくださったのですが、そのとき、子どもたちの様子や一日の流れを考えながら授業を行うことの大切さを実感しました。

帖佐：何をやるかに重きをおきがちですが、どうやるかが大切ですね。準備していたことでも、授業中に「違う」という感覚を子どもたちから感じたら、やらない勇気も必要です。

馬場：私は、学園が保護者向けに開催している教育基礎講座で学んだ後に、国内の教員養成講座や連携型教員養成講座で学びました。『一般人間学』を主軸に、学年ごとのエポック授業、フォルメン線描、水彩など、子どもの教育を追体験して学ぶことで、人間をどう見るかという指針がわかりました。失敗もありますが、そんなときは同僚に相談しながら、学んだことが自分の中に入り、つながっていきます。「どうしたらいいのだろう」と思った時、「学ばなくては」という強い意志を持てるようになりました。中国語のときは担当クラスの他の授業も見学し、与えられるのではなく自分

で取りに行き、子どもたちからも受け取りました。

帖佐：教員を目指している方には、「恐れずに飛び込んでみて」と言いたいです。そして自ら積極的に学んでほしいです。欲しないと吸収できないですから。

馬場：教員のみなさんは質問や相談をすると、教えるのではなく、見せてくれます。そして誰も否定しないですね。

帖佐：授業は何が起こるかわからず、その時その時作り上げていくものですから、見てもらうのが一番いいですね。

――実践しながら学びをリンクさせると、気づきが多く深まるのですね。ちなみに帖佐先生の夢はなんですか？

帖佐：まずは、目の前に困っている子どもがいたら、助けられたらと思っています。現代の日本の教育をよりよくしたいというと、大きすぎる課題にも思いますが、何か疑問を持ったとき、ひとりが動けばだんだん波及し、変わる可能性があるのではないかと思うのです。すべての子どもたちに「世界は楽しい、素晴らしい、こんなに夢がある」と思ってほしいし、「やろうよ、できるよ」と言える子どもたちを増やしたいです。その人がその人らしく生きられるよう、一人ひとりの子どもが楽しく生きられる場所を作りたいです。

――よく先生は大変だと言われますが、シュタイナー学校の先生方は楽しそうですね。

馬場：子どもと一緒に過ごすことが楽しい、一人ひとりの持つ力を生かして成長してほしいという思いは、どの教育現場でも共通していると思います。中でも、シュタイナー教育のなかには、自分が楽しみながら子どもと授業を作ることができるエッセンスがありますね。

――そのエッセンスを知りたいです！

帖佐：私たちが毎日繰り返し行っていることですね。シュタイナー教育はその年齢の子どもにあった濁りのない環境を整えます。すると、子どもたちは自ら何かを見つけ、手を伸ばして、「楽しい！」と世界とつながっていくのだと思います。もちろんものすごく大変なこともありますが、結局は全部その楽しさにつながります。教員が偉いわけでも、万能であるわけでもなく、ただ純粋に子どもを「その子の楽しさ」へ導くだけです。

――どういう方に学園の先生になってほしいですか？

帖佐：子どもと一緒に未来を作っていきたい方なら、どんな人でも。「学校の教育や教員はこうあるべき」「いつもすべてできて明るくいなくては」などの見えない枠や縛りを解き放ち、自分らしくあってほしいです。できないこと、知らないこと、大変なことも、楽しんでほしいです。

木原：できないことができたという経験が多いほうがいいですよね。私は金づちで、泳ぐことが好きではなかったのですが、「速く泳ぐより長くゆっくり泳いだほうがいい」と教えてくれた先生がいて、今は水泳の授業が楽しくできます。

帖佐：以前、ドイツの教員養成の先生が「僕が一番好きだった先生は音楽の先生。彼は音痴だったけど、全力で歌うことを楽しんでいた」と言っていて、記憶に残っています。そして子どもたちの方が私たちより精神性が高いと言いますが、本当にそうだな、と日々感じます。

馬場：朝や帰りの挨拶で子どもたちと握手するときに目を見ると、自分より高次の存在だと感じますが、いつも「私も頑張るね」と思います。

帖佐：子どもたちの目を世界に開かせるためには、いろいろな背景を持った人が必要です。さまざまなバックグラウンドを持った方たちと楽しくやりたいです。

第2期生募集　シュタイナー学園 **シュタイナー学校教員養成講座 2024**

日本で最も長くシュタイナー教育を実践してきた経験をもとに、シュタイナー教育の教員を目指す方に向けての養成講座です。

説明会 ❶ 2023 **11/18**(土)【名倉校舎 音楽室】 ❷ 2024 **1/20**(土)【吉野校舎 音楽室】

〈時間〉各日10:15～12:00　❶❷は同じ内容です。

詳細及び説明会申込み問い合わせ→

https://fujinowaldorf.tayori.com/f/20231118-20240120yosei-setsumei

シュタイナー学園の

先生たちに聞きました

～先生への道のり～

❶シュタイナー教育との出会いはいつ？

❷シュタイナー学校で教える前に就いていた職業は？

❸どこのシュタイナー学校教員養成を修了しましたか？

❹先生としてのやりがいを教えてください。

❺シュタイナー学校の先生、ここが大変！をひとつあげると？

❻先生としてやってみたい夢は？

Yukie Takahashi

髙橋 幸枝

(3年担任)

❶公立の小学校で勤務していたとき、学年主任の先生に子安美知子著『ミュンヘンの小学生』をすすめられて

❷公立小学校の教員

❸国内のシュタイナー教育教員養成講座を受講

❹小さな子どもたちと出会い、高等部に送り出すまでの間、一緒に過ごす日々

❺年齢を重ねるごとに、鬼ごっこで息が上がってくるようになってきました

❻現在担任しているクラスが8年生になるまで、この学園で健康で楽しく働けることです

Miwa Kihara

木原 美和

(7年担任)

❶地方紙で掲載された横川和夫さんの『もうひとつの道』で知りました

❷幼稚園教諭

❸以前、学校運営に関わっていた東京賢治シュタイナー学校で基礎コースを受講し、国内のシュタイナー教育教員養成講座を受講

❹子どもの成長を身近で感じられること、人間存在の意図や意味を背景に授業を実践できること

❺子どもの思春期に「教師が踏み台になる時期」がやってきますが、そのころ体力が衰える(年を感じます…)

❻カール・ケーニッヒのように「日本でキャンプヒルを創る」という大きな妄想を描いています

Shinji Yamazaki

山﨑 真嗣

(理科・工芸)

❶20年ほど前、育児の冊子で紹介されているのを見たのが最初。それから意図せず出会う機会が増加

❷公務員(土木)、木工・大工・林業、塾講師

❸国内のシュタイナー教育教員養成講座を受講。小中高の教員免許は通信教育にて

❹日々の子どもたちの生き生きとした笑顔、真剣な表情に触れること、苦難があっても成長を信じて関わり見守れること

❺勢いよく成長する彼らと共に、自分自身が成長すること。それが大きな喜び。でも、そろそろ体力も…

❻たくさん。役目としてはより充実した自然科学を学ぶカリキュラムや施設(科目ごとの教室、設備)の構築

Masahi Kokudai

石代 雅日

(音楽)

❶大学生当時、電車の中で、大学の先生からお借りした子安美知子著『ミュンヘンの小学生』を読んで

❸米国カリフォルニア州サクラメント近郊のルドルフシュタイナーカレッジ

❹クラスや学校全体で、精神的なよい瞬間を共有できたとき

❺アイデアが閃くように想像力を活発に働かせるだけでなく、それを実現させるための現実的な事務作業も必要な点

❻無料塾のような所で何かしらのシュタイナー教育ができないかなというのがたくさんある夢のひとつ

FUJINO STEINER
COLUMN

コラム アーカイブ　ニュースレター登録

13期卒業生 鹿俣智裕 さん　Tomohiro Kanomata

北海道にあるシュタイナー学校「いずみの学校」で、1年生の担任として教壇に立つ鹿俣智裕さん。幼稚園から高校までシュタイナー教育を受け、北海道で野外教育について学んだ後、再びシュタイナー教育に携わっています。そんな鹿俣さんに子ども時代から現在に至るまでのお話を聞きました。

※2023年2月の取材時の内容です。

▼シュタイナー教育との出会いを教えてください。

3歳の時、三鷹の「なのはな園」というシュタイナー幼稚園に通いだしたのが出会いです。兄が法人化される前のシュタイナー学園、「東京シュタイナーシューレ」に入学していたので、シュタイナー教育は意識することもなく、自分のまわりにありました。

その後シューレに自分も入学し、担任の先生のお話がとてもおもしろくていつも引き込まれたことを覚えています。クラスのみんなが一言ひとことに耳を澄ませ聞き入っていた、その空気感が残っていますね。木に登ったり外遊びが大好きで、兄がいたのもありクラスを引っ張るような活発なタイプの子どもだったと思います。

▼印象に残っている授業はありますか？

3年生で行った家づくりですね。深田さんという職人さんに教えてもらいながら束石を置き、稲藁と土を混ぜて土壁を作り…と日本家屋を作りました。家屋の上に登って屋根を作っていたとき、担任の先生に「智裕、気をつけて」と言われたのに夢中になりすぎて落ちてしまったことがあったんです。柿の木に受けとめられて無事だったのですが、気絶してしまっていて気づいたら担任の先生が涙していて。「先生の言うことはちゃんと聞かなきゃ」と思った出来事でした。

▼中学1年生にあたる7年生のときに、シュタイナー学園が学校法人化され藤野に移転しました。どんな思いがありましたか？

もちろん戸惑いもありましたが、自然の中にいることが好きだったので、環境的な変化を気持ちよく感じていたところもありました。7年生は転入生が来たり担任の先生が変わったり他の変化もあり、クラスとして大変な1年でもありました。ちょうど思春期の時期にも重なり、反発や反抗も生まれる年頃でしたが、自分は先生方や親を信頼していて不満は感じていませんでした。

学びはより深いものになり授業もおもしろかったのですが7年生になった頃から「なんで生きているんだろう？」という答えのない問いを抱えてドヨーンとする時期がはじまりました。思春期のエネルギーが外ではなく、内側に向かっていくタイプだったのかもしれません。そのドンヨリ感はけっこう長く続きました。

▼内側に悩みを抱えつつ高等部に進学されたのですね。

この学びを12年の最後まで体験したい、という気持ちがありました。ドンヨリしつつも学びは相変わらず楽しかったですし、ボルダリングをはじめたり自分の世界も広がっていきました。自然や植物に興味があったので9年生の実習である農業実習もとてもおもしろかったです。そして、トンネルを抜けたのは12年生のときだった気がします。

12年生の1年間で行う3大プロジェクトを通して、自分の中に溜まっていた力を出せたこと、形になることを成し遂げられたという自信を持てた。課題ととことん向き合ったことで、やっとひとりの人としてトンネルを抜けられた気がしました。特に印象的だったのは卒業オイリュトミーでベートーベンの「悲愴」のソロをしたことです。思考や言葉ではない身体表現を通してひとつのものを表現しきれたことは、他には代え難い充実感と達成感がありました。

▼12年生の課題を通してトンネルを抜けた、とおっしゃっていましたね。卒業プロジェクトでは何をテーマにしたのでしょうか？

大きなテーマで「自然と人間」というものでした。当時学園の8、9年生の合同授業で、富士登山があったんです。そこで登山家の戸高さんという方に出会いました。険しい山をニコニコしながらジャンベを担いで登り、中腹で叩いている。なんてかっこいい人なんだろうと思いました。そんな方と富士の圧倒的なスケール、美しさの中にどっぷりひたるような時間を過ごし、こんな世界が広がっているんだと感じました。ひとつの原点といえる経験です。

そのことがずっと心に残っていて、卒プロで登山に向き合いたいと思いました。地図読みや天気図など登山技術についてまとめながら、富士や長野県の涸沢などの山に登りました。戸高さんにも会いに行きました。なぜ人は山に魅かれるのかをプロジェクトを通して考えて、やりきったという気持ちで卒業しました。

▼卒業後は、北海道教育大学に進まれたのですね。

漠然と自分はいつかは教員をするのかな？という気持ちがありました。教員免許を取ることができて、卒プロで取り組んだ登山などのアウトドア活動が学べるところに進学したかったんです。北海道教育大学にアウトドアライフ専攻という学部があり、野外教育やカヌー、登山を学びました。

初めてシュタイナー学校の外の世界に出て、最初は冷たいな、と思うことや戸惑いもありました。でも学びたいことを学ぶためにここにいる、と思っていましたし、時間の中でまわりの人も自分もお互い理解をし合っていきました。

卒業後は山岳ガイドをしたいという気持ちもあったのですが、大学のプログラムでアラスカ大学に交換留学したときに登山で雪崩に巻き込まれてしまったんです。山岳ガイドは誰かの命を背負う仕事だと思ったら、その覚悟を背負って仕事はできないんじゃないか、と思いました。悩んでいた時、友人に教えてもらったエコビレッジに出会い、暮らしながら働いてみることにしました。

▼もともと環境問題にも興味があったのでしょうか？

環境への関心はずっとありました。アウトドアが好きだけれど、アウトドアはゴミが出る行為でもある。自然に負荷をかけてまで人が自然に入っていくってどういう意味があるのだろう？

自然に負荷をかけない暮らしってどういうものだろう？という問いがあったんです。

約2年間、北海道の「余市エコビレッジ」で太陽光発電やバイオトイレを使った循環する住環境で自給自足的に暮らしながらワークショップを企画したり、来客の管理をしていました。そのうち、もともとアウトドアの講師をしたりと交流があった北海道のシュタイナー学校「いずみの学校」の先生からうちの学校で教員をしてくれませんか？と声がかかり、今は1年生の担任をしています。

▼シュタイナー学校で教員をしたいなという気持ちもありましたか？

ありました。けれども子どもたちのためにも自分のためにも、いろいろな経験を経てからのほうがいいだろうな、と思っていたので30歳過ぎたくらいかな、と漠然と思っていたんです。実際は26歳で教員になりました。教員として再びシュタイナー教育に携わってみると、子どものときには見えていなかったものが見えておもしろいな、と思います。自分が出会ってきた先生方はすごかったな、とも感じます。

自分が大事にしたいのはその子がその子らしく、その子が持っているものを伸ばすことです。「教える」という言葉はあまりしっくりこなくて「共に」という言葉が浮かびます。シュタイナー教育は自己教育し続けられる人を育てる、という教育でもあると思うんです。自分はどう生きていくのか、自分に対する自己教育ができる人を育てる。子どもたちと向き合い、子どもたちと「共に」自分も向き合い続けたいです。

▼最後に、シュタイナー教育で得たものはなんだと思いますか？

自分を生きる力、かな。自分自身を生きることに向き合い続ける。「なんで生きているんだろう？」と7年生から自問し続けながら生きている。経験を経ていくとやるせないこと、悲しいことも世の中にはたくさんあるけれど、それでも人間らしく、生きていく。それが自分を生きる力かな、と。そんな力を得た気がします。

シュタイナー学園教員養成講座 開講に寄せて

シュタイナー学校の教員養成機関は国内外にあります。国内ではこれまでいくつかの学校が連携して講座を開いてきましたが、十年余りの積み重ねを経て、今年度より新たにシュタイナー学園主催の教員養成講座がスタートしました。

この講座は学園の現役教員が教えるのが特徴です。理論や方法論も学びますが、教員が今の子どもの姿を伝え、また受講生が学んだ内容を実践することを大切にします。例えば、子どもたちにお話を語ることも、方法を伝えるだけでなく、受講生の皆さんも練習して発表します。お話の覚え方ひとつとっても、やってみないとわからないことはたくさんあります。

第1期受講生には教員志望の学生もいれば、すでに教員の方、自身の学びにしたい方、学園卒業生の保護者として改めてこの学びを捉え直したい、という方もいて多様です。将来、講座を修了した方が学園で教員になってくだされば何より嬉しく思います。シュタイナー教育に興味を持った方は、ぜひ教員養成講座の扉を叩いてみてほしいと思います。

シュタイナー学園 教員養成講座担当教員
根岸初子

Information

9/9	(土)	入学・転入説明会(願書配付会)
9/9	(土)	高等部体験授業
9/15	(金)	オープンスクール
9/30	(土)	シュタイナー学園出張講座 シュタイナー教育体験授業(青山学院大学)
10/6	(金)	オープンスクール
11/5	(日)	学園紹介展示(藤野まるまるマルシェ内)
12/21	(木)	二学期祭(公開)・オープンスクール
2024 1/6	(土)	二次募集 入学・転入説明会(願書配付会)
1/6	(土)	高等部体験授業
1/12	(金)	オープンスクール
2/17	(土)	12年生卒業オイリュトミー公演
2/29	(木)	三学期祭(公開)・オープンスクール
3/23	(土)	春のシュタイナー学校＆移住ツアー

※新型コロナウイルス感染症拡大の影響等で予告なく変更する可能性がございます。
詳細はシュタイナー学園のHPをご確認ください。

Fujino Waldorf School

シュタイナー学園　初等部・中等部
〒252-0187 神奈川県相模原市緑区名倉2805-1
TEL 042(686)6011　FAX 042(686)6030

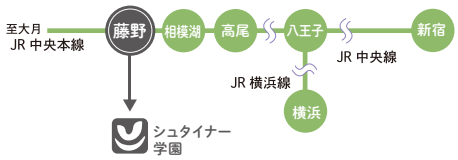
シュタイナー学園　高等部
〒252-0183 神奈川県相模原市緑区吉野407
TEL 042(687)5510　FAX 042(687)5540

https://www.steiner.ed.jp/　シュタイナー学園　検索

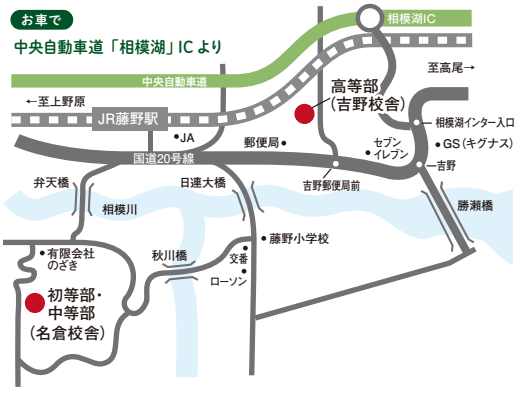
@fujinosteinerjapan　@steiner_gakuen

access

電車で JR中央本線「藤野駅」下車



お車で
中央自動車道「相模湖」ICより



シュタイナー学園通信

2023年9月　制作・発行　学校法人シュタイナー学園

表紙 Photo：川村拓希